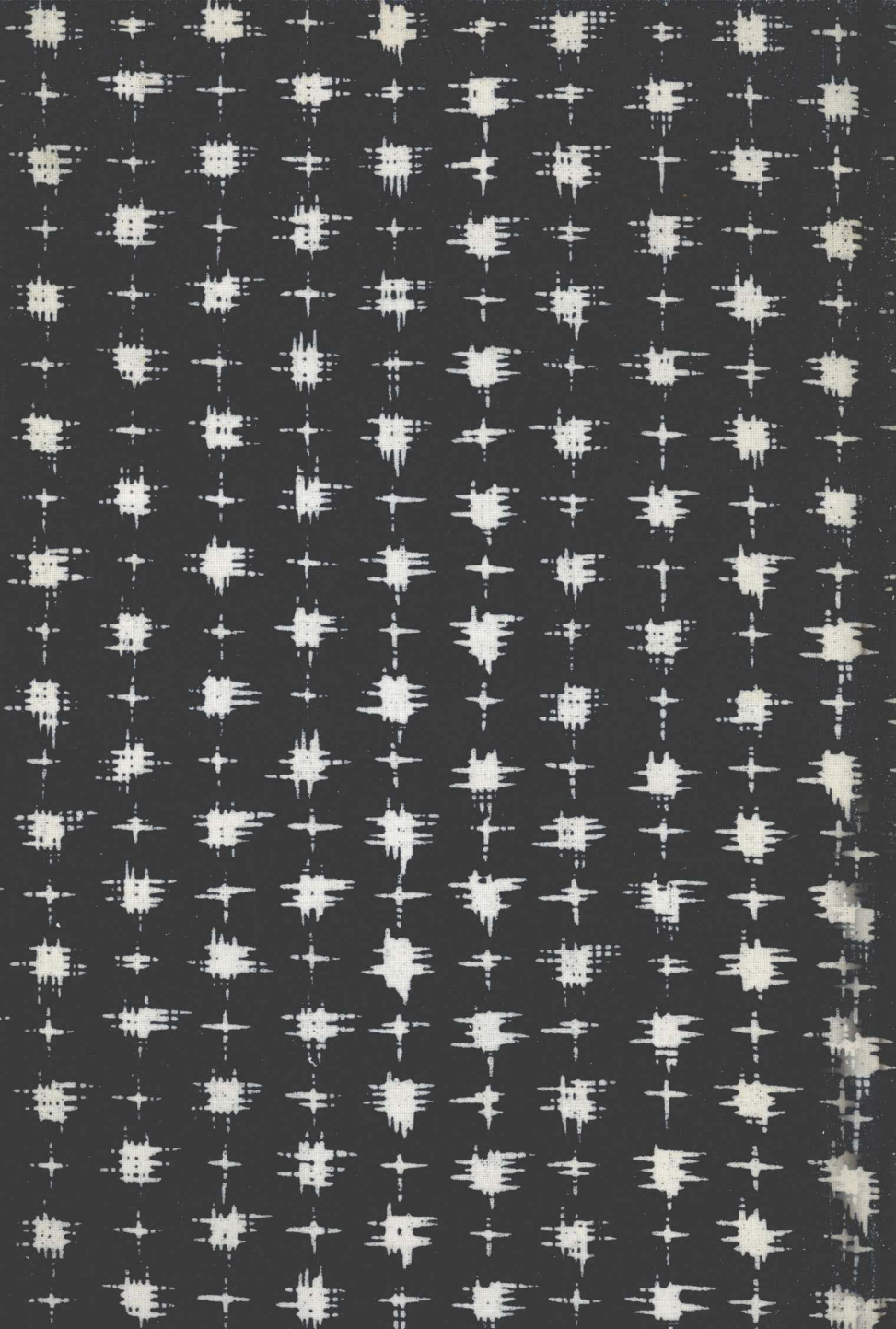




木山捷天全集

第三卷

講談社

木山捷平全集 第三卷

昭和五十四年一月十五日 第一刷発行

定価 三八〇〇円

著者 木山捷平

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

編集 株式会社第一出版センター

印刷 豊国印刷株式会社
製本 島田製本株式会社

© 木山みさを 昭和五十四年

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

木山捷平全集 第三卷 目次

〈小説〉

人差指

逢びき

骨さがし

耳学問

節穴

第三国人

冬椿

防火用水

竹の花筒

貸間さがし

帽子と足袋

谷間の鶯

二

六

四

壺

壺

六

九

一〇三

二四

三三

一五

一四

お守り札

一六

パーの十蔵

一七

増富鉾泉

一八

男の約束

一九

落葉

二〇

下駄にふる雨

二一

鳴るは風鈴

二二

処女

二三

コレラ船

二四

歲月

二五

〈随筆〉

I

阿佐ヶ谷会雜記

二六

街頭演舌

二九七

亀井勝一郎のこと

二九九

青木先生のラッパ

三〇五

酒の功德

三〇九

文壇将棋新番付

三一〇

ふるさとの味

三一一

日本陸軍

三二五

故郷笠岡

三二七

備中記

三二九

縁

三三〇

II

観察眼不足

三三三

母が形見の帯

三三四

私の五つの愉しみ

三三六

わが庭の記

三三三

少女の鯉

三四

愚かなる私ごと

三五

米一斗五升

三七

蜂の話

四〇

赤い木の実

四二

日記 昭和三十一年～三十四年

四五

あとがき

木山みさを

五五

題字 蓬 萊 利 兼
装幀 アトリエ・セブン

木山捷平全集

第三卷

小
説

人差指

一

先年物故した或る劇作家は、死の直前、つくづく自分の指を眺めて、

「随分、この指も、つかったなア」

と、言つて満足げに息を引き取つて行つたそうである。

その場にどういふ人々が、居合わせたのかは聞きもしたが、遺言としては洒落たものである。それからこれは余談だが、昭和初年の不景氣時代、私がまだ若かつた頃どこかの田舎で首を吊つた爺さんがあつた。その爺さんが遺言を記して、

「我が靈魂は宇宙に、身体は小屋にあり。一見驚くなかれ」

とやったことがある。これは新聞に出たから、覚えてい

る人もあろう。私はその頃失業のようなことをしていて、いつそ死にたくなったりしていて、どうせ死ぬなら、こういう風に、明朗にやりたいものだと思つたので、今でも覚えているのである。

余談はさておき、私は一昨年の秋、ある酒場で、右の人差指をガラスのコップで切つて、すぐに近くの病院に行つて、一針ぬつてもらつたことがある。時刻は午前の一時頃で、先生がいるかどうか怪しかったが、都合のいいことには、丁度産科の方でお産が一つあつて、病院があいていたのである。

「何日位で治りましょう？」手当が終つて、若いインターンらしい先生に私がたずねると、

「十日ぐらいで治りますよ」

とインターンが言つた。丁度その時、廊下を一つへだてた産室から、オギャ、と赤ん坊が生れた声が聞えた。

「やあ、これは、おめでたい。袖すり合うもタシヨウの縁か」と私が感想をもらすと、顔見知りの看護婦がくすくす笑つた。

この病院は、私は初めてではなかつたのである。少し前のことだが、私は初老のノイローゼを征服すべく、少し遠方の或る所で脳下垂体の埋没をやつたが、その結果がはかばかしくなく、埋没箇所の大腿部が化膿して歩行も出来な

くなったので、この病院で切開手術をして貰ったのである。化膿の程度は、膿が膿盤のうばんに三四杯でた程度で、あと四十日ばかり、タクシーで通院して完治したのだが、なにしろ当時脳下垂体は流行の先端をきっていたので、流行には敏感な女性——看護婦たちの間で大評判を獲得していたのである。尤も大評判と言うのは、こちらの思い過しかも知れないが、少くとも中評判くらいは、取っていたのである。

あくる日、治療に外科室を訪れると、

「おや、何か、お顔に、見覚えがありますなあ」

と、科長先生が思い出を引き寄せるように、私の顔をうかがった。

「例の脳下垂体ですよ。……また、お世話になります」

と私が答えると、看護婦たちがまた、くすくすと笑った。

「ああ、そうだった」と思い出して科長先生も前歯の一本抜けた顔をほころばせ、「あれからまた、やり直しをされましたか」

「やり直して、脳下垂体の……？」

「ええ」

「ご冗談でしょう。もう、あんなバカな真似は、こりごりですよ」

「それで、こんどは——と、……ガラスの傷ですか」

科長先生はカルテに目を注ぎ、看護婦のつけた繃帯のあとをちらりと眺めた。カルテには右の指の略図のほかに、創傷の原因も記入されているらしいのである。

「そうなんです。こんどはガラスなんです」と私は言わざるを得なかった。「実は昨夜、その大衆酒場で一杯やりまして、何が動機だったか、代議士の政談演説の真似のようなことをやりました。」「ええ、満場の諸君、現代日本民主主義の病弊は」とか何とか文句は忘れましたが、そんなことを嘔鳴って、テーブルの上をドンと一つ叩いたところ、そのはずみを食ってコップが割れて、気がついた時には、この指から血が吹き出していたんですよ。いやア全く、柄にもない政談演説の真似などするもんじゃないと、今朝はつくづく後悔しましたが……」

と、あまり名誉の負傷でもない、酒の上の顛末を陳弁すると、

「いや、お元氣は、結構です。……どうぞ……」

と、看護婦に処置を命じ、先生は寝台にねて待っている足の骨折患者の方へ移って行った。

私の指の処置は、赤チンキをぬって、黄色い粉末をふりかけ、繃帯を取りかえるだけのことである。実に簡単な処置で、前的大腿部切開の時のようにタクシーに乗る必要も

なく、散歩がてら歩いて通えた。経過も順調で、インターン君が十日と言ったのは少しサバがあったが、しかし十四日目にはヒマが出たのである。

まずは一安心のいであったが、繃帯のとれた自分の指の表面の創はすっかり癒えていたのに、その中の奥の方に痛みが遺つていて、ともすると私の気分はすぐれなかった。痛みの程度は、それほど大したものとは思わぬのに、それでいて感覚的にはびりびりびくのである。例をあげれば、友達から来た手紙なんかも、封を切る時の指先の痛みが億劫で、つい机の上におっぱり出しておくという始末なのである。すると妙なことに、自分が友達から絶交状でも叩きつけられているような、滅入った気持ちに陥入るのである。

二ヶ月余り過ぎた或る日、私は一度ヒマをもらった病院の外科室を訪ねた。その時分、私は、同じ病院の皮膚泌尿器科に通院していたので、外科室を訪ねるのに、さして距離的苦労は要しなかった。皮膚泌尿器科の方の病気は、「神経性後頭部円形脱毛症」と長つたらしいもので、俗に言う台湾ハゲのことであったが、この方は外見はともかく、痛みはちつともないので、その点ラクであった。

「先生、いつかガラスで切ったこの指のことで、又お伺いしたんですが。どうもこいつが、何時までたっても痛みが

取れないで、困っているんですが……」

と、私は午前の診察が終つて、熱気消毒器だけがたぎっている静かな診察室で、一服している外科の科長のところへ行って言つた。

「まだねえ。……あれは何時でしたかなア」

と、科長が尋ねた。

「去年の十一月十日です」

「指は曲りますか」

「指は曲ります。この通り」

私が指の関節を屈伸してみせると、科長はしずかに私の指をつまんで、傷跡のところを押えて、さぐるようにしていたが、

「ここに小さな癍痕ができていますねえ」と言つた。

「はあ、どうもそうらしいです。そのグリグリのところ、鈍痛のような痛みが遺っているんです。それからこれより先の方が、物にふれると、ビリビリッと電気にでもかかったように、神経的に痛むんです。この左半分の部分が」

「それは、一種の神経痛ですよ」

「はあ、どうもそのように私も思っているんですが、しかしこんなに何時までも痛みがとれないのは、ひよつとしたら怪我をした時、ガラスの破片が中に残っているのではな

いかと疑ったりするんですが、そんなことはないでしょう
か」

「恐らく、ないでしょう」と科長が言った。

「でも、気休めといえますか、一度レントゲンか何かで、
調べて頂くわけには行きませんか」

「無駄だと思えますねえ。もしも仮りにガラスの破片が遺
つていたとすれば、もう何か、それに相応した故障が、あ
らわれて来る筈ですよ」

「ああ、そうですか。しかし先生、このいい年をして、弱
音をはくのは見つともないですが、この指の痛さのため、
私は時に死にたくなることがありますよ」

「まさか。……もともとと大怪我をしている人もありま
すよ」

「じゃあ、そのうち、だんだん、治るのは治るでしょうか」

「そう思いますネ」

「それではいつそのこと、思いきって、一年待ったらよく
なるでしょうか」

「一年!?」と、先生が笑いだした。「一年みておけば、そ
れに越したことはないでしょう。しかし一年待つて、もし
治らなかつたら、治らないかも知れませんよ」

あとは、笑いにまぎれて、私は外科室を出た。とかくし
んねりした内科先生に比べて、この外科長は、あっさりと

てきばきしているのに、私は前から好感をよせていた。今
日も、気休めな薬などぬるではなかつた。

外科室の隣は歯科室である。それなのに、先生の前歯が
相変らず一本かけたままであつたのも、何とはなし、却つ
て、信用がおけるように思えた。

二

それなのに、その後五六ヵ月が過ぎても、私の指の痛み
は、一向よくなる気配はなかつた。相変らず、おんなじな
のである。あの日、私は気持の大奮発をして、(たとえば
大道商人が百円の品物に、最初五六百円の値をつけておく
ように)一年待つたらと、先生が笑い出すほど大見得を切
つたが、怪我をした日から数えれば、もうぼつぼつその一
年が目の前に見えて来ていた。私の心は周章^{しゅうしょう}ではじめた。
先生があの時、何気ない風に、一年たつても治らなかつた
ら、治らないかも知れないと言つた言葉が、改めて思い出
された。

自然の治癒力ばかりにたよつていられないもどかしさ
に、私は或る晩、晩酌を一本やつたあと、家内に言いだし
た。

「どうも、じれつたいなあ。一つ、どつか温泉にでも行つ
て来ようかなア」